異世界シナリオ戦記（いせかいしなりおせんき）

作者名：高橋祐太（たかはしゆうた）

原稿枚数：１１枚

登場人物表

・あたし……30歳。売れない脚本家。

・アテナ……異世界王国の女戦士。

・リリス……異世界の悪の女将軍。

・ケンタロウ……白馬の王子様。

その女神は美しく、逞しかった。剣を抜くや、モンスターのような賊兵どもを次々と倒していった。
「アテナ！　今日こそ、決着をつけてやる！」
朽ち果てた賊兵の向こうに悪の女将軍リリスが立ちはだかっていた。その手には古式の拳銃があり、銃口はアテナに向けられていた。
「リリス……そんな卑怯な手を使っても、お前は私に勝てない」
「寝言は死んでから言え！」
トリガーが引かれ、銃弾が発射された。しかし、アテナはよけることもなく、剣を大きく振りかぶった。弾き返されたバレットは今来たリリスの銃口にすっぽりとはまり、大爆発を起こした。
「今日のところは見逃してやる！」
煤で顔じゅう真っ黒にしたリリスは捨て台詞を吐くと、さっと姿を消した。アテナは精悍な顔つきのまま、堂々と宣告した。
「この王国の平和を乱す者は何びとなりとも、この守護戦士アテナが許さない」

……つまらない。書いていてつまらない。
今、あたしは締め切りを目の前にして焦っていた。アニドル脚本コンテストという公募をネットで見かけたのは、1週間前だった。
新人脚本家……と言っても、オムニバスのホラーVシネでデビューしたきり仕事のない、普段はスーパーのレジ打ちバイトをしている身だ。正月明けて、都市伝説や心霊モノの投稿動画用ネタ案件をクライアントからボツにされまくっていた頃、たまたまこのコンテストを発見したのだ。
これはやるしかない！　脚本教室を受講していた頃からいろんなシナリオコンテストに応募したことはあるけど、せいぜい1次か2次止まり。でも、こんなマイナーな、いや失礼、マニアックな、いやニッチな誰にも知られていないコンテストなら意外に行けるかも。

だけど、アニドルって何？　アニメ？　アイドル？　全然分からない。というか、シナリオ形式じゃなく小説形式じゃないか。小説なんてもっと分からない。プロットみたいなのでいいのかな。枚数だって規定がない。

もうやめよっかなー、と思ったけど、短くても大丈夫ならやってみるか。ここでくじけたら、もう先がないような気がする。

書き始めていきなり筆が正確にはパソコンを打つ指が止まった。ファンタジーなんて書いたことがないのだ。気づけば、締め切り前日の夜。ああ、どうしよう。誰か書くのを手伝って！

まあいい。まずは景気づけにケーキを食べよう。あ、これは駄洒落じゃないからね。今日はあたしの記念すべき30歳のバースデーなのだ。専門学校を卒業し、脚本家を目指すと決意して１０年。いろんな企画に携わっても映像化は実現せず、シナリオを書いても自分の名前が載らないことも何度か。ギャラだって踏み倒されてばかり。それでもひたすら我慢し、恋愛も封印して、我ながら頑張っていると思う。

バイト先のスーパーで見切り３０％オフのモンブランを買ってきた。ダイエットは明日からでいい。毎日、明日からと決めている。

キッチンでふたを開けようとした瞬間、手が滑って落としてしまった。半年以上、掃除をしていなかった汚い床に、さかさまに潰れたモンブラン。床に面していない部分なら、まだ食べられると思ったが、フォークで突き立てたら何だか泣けてきた。もういい。誕生日なんて２度と来るな。永遠の２９歳でいい。

コンテスト原稿を書く気も起きず、不貞腐れて寝ようとした。

「寝るのはまだ早い」

ワンルームの万年床からキッチンを見ると、半裸のアマゾネス風の美女が床のモンブランを指ですくって舐めていた。腰には大剣の鞘がぶら下がっている。

「どちらさまですか？」
「異世界王国の守護戦士アテナだ。おぬしの執筆の手伝いに来た」
「はあ？」
「３０歳になっても穢れを知らぬ乙女は魔法使いとなる。おぬしは魔法を使って、私を呼び寄せた」
夢でも見ているのだろうか。恋愛経験ない歴＝年齢の男性は魔法使いなれるという都市伝説は知っているけれど、女性にも当てはまるとは。
まあ、いい。手伝ってくれるのなら大いに助かる。あたしは執筆がうまくいっていない現状を相談した。
「ロマンスが足りないな」
ノートパソコンに向かい、途中までの原稿を読んだアテナと名乗る女性は簡潔に言い切った。
「要はラブ、恋愛要素を入れなきゃ盛り上がらない」
「やっぱりそうですよね……」
「いっそのこと、戦闘シーンもなくしたらいい。白馬の王子様とのイチャイチャしたあま～い話がいいんじゃないか。私のキャラならまさにツンデレだろ」
「えーっ、バトルなくしちゃっていいんですか？」
「正直言うとな、戦うことに疲れたんだ。体、しんどいんだよ」
「でも、悪の女将軍リリスの出番がなくなってしまいますよ」
「あんな脇役キャラ、どうでもいい。それより早く白馬の王子様を出せ」

言われるがまま、あたしは書いた。その間、アテナはコーヒーを入れてくれたり、肩を揉んでくれたり、至れり尽くせりだった。こんなアシスタントがほしかった。
白馬の王子様を登場させた部分を読ませて、アテナは激怒した。
「白馬の王子様って、これ、ケンタウロスじゃないか！」
「一応、名前はケンタロウと名付けました」

ケンタウロスとはギリシア神話に登場するキャラで、馬の首から上が人間の上半身という、そう、あの射手座をイメージしてくれたらいい。
「これじゃ、イチャイチャできないじゃないか！　相手は馬だぞ！　しかも、セリフはヒヒ～ンだけ！」
「種を超えたラブストーリーってのもありじゃないですか。ファンタジーっぽくて。あ、ファンタジーは応募規定の条件なんで」
ちなみにこのケンタウロスのケンタロウさんは王国の第二王子という設定。しかし、兄の第一王子が王太子に決まったため、半人半獣にさせられてしまったという悲劇のキャラクターなのだ。

「もういい。私の言うとおりに書け」
アテナが提案したストーリーは彼女が別の世界……あたしが住む現実の世界にやってくる話だった。アテナにとってはこちらが異世界。そこで人間の男性と恋に落ちる物語だった。
あたしはいざ書こうとして行き詰ってしまった。普段、幽霊やゾンビや殺人鬼なんかのホラーばかり書いていて、恋愛モノはとんと無縁だったからだ。
ドロドロ不倫男、別れたはずなのにストーカー男、借金してまで競馬につぎ込むギャンブル男、モラハラするヒモ男……どれもアテナには却下された。
「だから白馬の王子様を出せと言ってるだろ！」
「石油王の息子なんていかがですか？」
「おう、知ってるぞ。アラブの王国か。白い装束を着て、ぴったりじゃないか」
「石油と言っても、過疎の田舎でガソリンスタンドを経営している一家……」
アテナはいきなりあたしに関節技をかけてきた。これはかの有名なロメロスペシャルじゃないか！　別名、吊り天井固めと呼ばれる難易度の高い

ものだ。やるなアテナ、かなりのテクニシャンだ。あたしは両手両足を絡まれながら、のけぞるように上空に浮き上がっていた。
「ただのイチャイチャなんてつまらなくありません？　人物の葛藤もドラマの盛り上がりもなくて」
「じゃあ、今のおぬしの書いている異世界バトルの話は心情が描かれているのか？　あたしがただ強くて、敵をバッタバッタなぎ倒すだけじゃないか」
　はい、そうです。そのとおりでございます。
「おぬしが恋愛経験ゼロだから書けないのは分かる。だったら、恋愛に対する理想や願望を盛り込むんだ」
「う～ん……よく分からない……」
「作家だろ。イマジネーションを駆使しろ。バトルだって、人殺しだって、異世界だって描けるんだ」
「恋するのが怖いのかな……恐怖の対象でしかない」
「プロでやっていきたいんだろう？　だったら、クライアントの要請に応えろ」
　そうだよなあ。だからあたしはダメなのだ。
「分かりました。今は時間がないから次の作品で挑戦してみます。とりあえずこの作品では、やっぱり元の世界に帰って、戦ってもらえませんかね？」
「いやだ！　私はもう戦うことに愛想が尽きた！　おぬしがやらないなら、私自身でやる！」
　やっとあたしはロメロスペシャルから解放された。しかし、アテナは剣を残して部屋から出ていってしまった。こっちの異世界で恋愛すると決めたらしく、イケメン探しの旅に出かけたのだ。

残り半日となり、あたしは執筆をあきらめてしまった。どうせ賞なんて取れっこない。やっても無駄だ。あたしは不貞腐れて昼寝をしようと万年床に入った。

そこへまたしても別の訪問者が現れた。今度は黒い透け透けなセクシーな衣装にプレートアーマーと呼ばれる鎧を部分的に装着した妖艶な美女である。手には古式の銃。ああ、彼女がリリスかと、あたしはすぐに受け入れてしまった。

「アテナはどこだ！」

「残念ながら、アテナさんは守護戦士を引退されまして、愛を求めて旅立ちました」

「愛だと？　男まさりでクソまじめすぎるあいつに男なんてできるわけがない。今までだって、いろんな男が求愛してきたが、けがらわしいと言ってことごとく突っぱねてきたんだ」

「そういえば、アテナさんもヴァージンですもんね。でも、心の底では寂しかったのかも。いつも一人で戦っていましたから」

「私の立場はどうなる？　宿命のライバルがいなければ、物語が終わってしまう！」

「いいじゃないですか。もう戦うことも、アテナに負かされることもないですから。噛ませ犬を卒業ですよ」

「うるさい！　私はあいつを倒すことだけを生きがいにしてきた！　私の生きる目的が……存在価値が……」

リリスは大仰なしぐさで天を仰いだり、頭を抱えてしゃがんだりしていた。いちいち、オーバーアクトすぎる。セリフもくさい。

「こうなったら、きさまが戦え！」

「は？」

「あいつの代わりに私と勝負しろ！」

気づくと、あたしは劇中の異世界王国にいた。しかも、衣装はなぜか制服コスだ。そうか、アニドルって学園系アイドルだったなあと、おぼろげながらに思い出した。だけど、30歳のあたしには、さすがにきつい。

「よくぞ来た！　今からきさまは私のやられ役。主役は私がもらった！」

リリスが高笑いしながら、モンスターの手下どもをはべらせて仁王立ちしていた。

「かかれ！」

賊兵モンスターたちが一斉にあたしに向かってきた。ちょ、ちょっと待って！　無理無理無理！　思わず手にしていた物を振りかぶった。モンスターが吹っ飛んだ。

「？」

あたしが両手に抱えていたのは、でかくてぶっとい槍のような武器だった。違う。槍じゃなく、どう見ても巨大な万年筆だ。

「なるほど。さすが物書き。ペンは剣より強し……か。だが、銃には勝てないだろ？」

銃口を向けられ、あたしは両手をバンザイして、すぐに降参した。

あたしは磔にされていた。マニアが喜びそうな展開だ。目の前に立つリリスは手に鞭を持っていた。いやいやいや、あたし、そういう趣味ない！　それにこの脚本コンテストは全年齢対象じゃないの？　こんな描写ダメ！

「きさまは一生、私のスレイブだ。さてと、どこから叩こうかな？」

もうね、リリスが至福の笑みを浮かべていて、完全に変態だ。ホント、勘弁して！　誰か助けて！

「ひひ〜ん！」

馬の鳴き声が響いてきた。見返すと、森の奥からケンタウロスのケンタロウさんが颯爽と駆けてくるのが見えた。またがっているのはアテナだ！

「主役はこのアテナだ！」

「今頃来ても遅い！」

リリスは銃を連射するが、ケンタロウさんは華麗によけていった。あたしの横を通り過ぎる際、アテナはさっと大剣を振り抜いた。あたしを拘束していた縄が解けた。
銃声と同時にケンタロウさんが倒れた。体からは青い血が流れていた。
「ケンタロウ！」
「ひひ～ん……」
アテナは寄り添うが、ケンタロウさんは帰らぬ馬……となった。
「リリスめ、許さん！」
「やっと目覚めたようだな！　きさまに愛は似合わん！」
アテナが剣で向かっていき、リリスは鞭で対抗した。激しい女のバトルが繰り広げられた。
「アテナ、きさまが本当に愛しているのはこの私だ！」
「リリス、何を言う！　私はお前のことなど……もしや、お前こそ私のことを……」
「まさか……どうなっているのだ、この展開……」
アテナとリリスが同時にあたしを見た。あたしはその場でノートパソコンで執筆していた。
「2人はお互い愛し合ってるのよ！　じゃなきゃ、こんなに永遠に戦い合えないでしょ！　どっちか片方がいなくなったら寂しいじゃない！」
「待て！　私はこんな女将軍なんか……」
「同じく！　守護戦士を倒すことだけが私の生きがい！」
「いいから戦い続けて！　こんな美しいラブシーン、最高じゃない！」
「クソ！　作者の思うつぼだ。アテナ、どうする？」
「作者とはまさに神なんだな。世界を作り、人物を操る。分かった。作家先生さんよ。私たちは戦い続ける。その代わり、いい作品にしてくれよ」
「オッケー」

こうして、あたしが書いた『異世界シナリオ戦記』はエンドマークを迎え、ぎりぎり提出に間に合った。結果はどうなるか分からない。それでもあたしは書き続けるだろう。全能の神として物語を紡ぎしていくのだ。

今日もバイトからヘトヘト帰宅し、ホラー企画を考えなければいけなかったが、ひとまず万年床に倒れた。

「作家先生！」

「寝てないでしたくしろ！」

びっくりして見返すと、アテナとリリスが並んで立っていた。

「異世界王国の王太子ミノタウロスのミノタロウが新国王に即位したんだが……悪政を敷いて、暴虐の限りを尽くしている」

「今から一緒に来て、戦ってもらうぞ」

ミノタウロスってことは人間の体に牛の頭か。何なんだよ、一体。あたしは仕方なくノートパソコンを持ち、アテナとリリスとともに再び異世界へと向かった。

まだまだ物語は続きそうだ。

（了）